



ている。

ここで用いられている分類法は、任应秋以来の伝統を受け継ぎつつ、著者が独自に考案したもので、各医家をその臨床的特徴に従って細かくグループ分けしており、特に、明清代の中国医学の理論の動きがとてよくわかるように書かれているのが評者にはうれしい。

用いられている分類は以下のようである。

《外感熱病流派》

通俗傷寒派・温疫派・温熱派・伏气温熱派・經典傷寒派

《内傷雜病流派》

易水内傷派・丹溪雜病派・弁証傷寒派・經典雜病派

《外科流派》

正宗派・全生派・心得派

《その他》

民間医学派

《日本と韓半島の流派》

日本後世派・日本古方派・朝医四象学派

中国伝統医学の病理論において最も重要であるのは、正気の状態と邪気の性状、および両者の間に生じる邪正相争の形態である。本書では、流派を、外邪を重視する「外感熱病派」と正気を重視する「内傷雜病派」に大別し、疾病の違いのためこれらと同列に論じられない「外科流派」と、方法論の違いのためにやはり同列に論じられない「民間医学派」を別項で扱い、中国伝統医学理論の歴史の変遷がよく理解できる

ような構成がとられている（「日本と韓半島の流派」は本論ではなく附録の要素が強い）。

記述の至るところに著者の臨床的な眼が光る。特に、「傷寒論」を高く評価し、宋元以降の哲学的理論の偏重に対していささか批判的な姿勢が、かいま見られるのは、著者の考えの根幹がいかなるものであるかを示して、興味深い。

日本における古方派出現の背景には、中国からの『傷寒論』研究ブームの渡来と、儒学における復古運動の影響があった。そして、我々は、これが日本だけの特殊な現象であると思っている。しかし、吉益東洞（一七〇二〜一七七三）と同じ時代の中国に徐靈胎（一六九三〜一七七二）という名医がいて、宋元明代の医学理論に重きをおかず、漢唐代の医学に傾倒し、『黄帝内経』『難経』『傷寒論』『金匱要略』『神農本草経』『千金方』『外台秘要方』を重視し、それに基づいた臨床を行っていたことを知る人は少ない。これは、実に山脇東洋をはじめとする日本の古方派に相通じる考え方であり、彼が著した『傷寒論類方』（一七五九刊）は、吉益東洞の『類聚方』（一七六二序）に、その発想に於いても、内容に於いても、とてもよく似ている。

異なった地域にありながら、同じ時代に同じような発想が生まれる。一見奇異に思えるこの現象に、著者は共通の真理の存在を見たのであろう。徐靈胎を中心人物の一人とする經典雜病派の記述に最も力が入っているのも故なしとしない。

この書を読んでから、もう一度眼を日本に転じてみよう

十七世紀の日本の医学界に極めて大きな影響を及ぼした書物は、『万病回春』『医方考』『医学入門』『本草綱目』の四書である。しかしながら、これらの書物の著者たちは、『本草綱目』の著者・李時珍を除いて本書に登場しない。龔廷賢、吳崑、李挺の三人はいずれも優秀な医師であったが、中国医学史上、時代をリードするような学説を生み出した人ではなかったからであろう。このあたりにも中国と日本の認識のずれが少なからず存在する。

日本の研究者はこれらの点に注目し、日本における各家学説研究に本書の成果を取り入れてほしい。そのことがまた、中国のこの分野の研究に裨益するところとなるはずである。本書を医史学研究者に等しく推奨するには、内容があまりにも専門的すぎよう。しかし、漢方臨床家にはぜひ一読してもらいたいと希望する。中国の各家学説など自らの臨床に全く関係ないと考えておられる方でも、中国伝統医学の学説の形とはこのようなものであるということを、ぜひ認識していただきたいと思う。少なくとも、漢方医学がたった一つの理念で動いているのではないということを理解していただけるであろう。

(安井 廣迪)

〔東洋学術出版社、千葉縣市川市宮久保三一―一五 電話〇四七―一三七―一八三三七、二〇〇〇年十二月八日、A五判 二九〇頁、本体価格三六〇〇円〕

正木 繁 著

『消印は知っていた―幕末から明治・大正・昭和の「たより」が綴る庶民医療史』

題名が示すように、郵便物から見た医史である。幕末から昭和四十八年まで一二年余りを編年体で記している。

著者は「全国の郵趣業者や古書店、それぞれの即売会などの人たちから電話やファックス等で情報を集め」「休日や休診日を利用して全国の手紙市に出かけ」て資料を収集したという。掲載されている資料は手紙と葉書だけでなく、その年に関係ある錦絵・医書・種痘証・双六・広告・ポスターなど種類も多い。エネルギッシュに資料収集された様子が察せられる。

これら豊富な資料を駆使して庶民の医療との関わりを語っているが、手紙に多く見られるのは、感染症と闘う患者とその親族からの切実な声である。

明治十二年のコレラ大流行では「幣村八月十一日克烈刺病発ル。二週間之内死亡廿人程有之」と悲惨な状態を伝えている。明治二十八年にはコレラが再び流行し、九月三日に第三高等学校医学部(岡山大学医学部の前身)は「悪疫流行二付、夏期休業ヲ本月二十日迄延期ス」と関係者に通知している。

北里柴三郎とベーリングが発明したジフテリア血清は明治二十九年に製造販売され、その広告ががき同年の七月に出ている。その後、インフルエンザワクチンの製造や皮下注射